

伊勢物語三段階成立論続貂

—口承文芸から書承文芸へ—

田村俊介

一 三段階成立論批判とその再検討

三段階成立論と呼びならわされている片桐洋一氏の仮説^①はその後定説化したようにも言われるが、対する疑問・反論も多方面から提出され、平成七年の時点では六つの点にまとめられる。

段階成立ではなく一回的な成立ではないかとするもの、第一次『伊勢物語』が十数段では物語としてあまりに小規模ではないかとするもの、特定の歌集に存在しないからその物語はその歌集以後という考えには従えないとするもの、『業平集』の成立年代への疑問、業平に始発しながらなぜ異質な方向への大きな増益が始まるのか、一世紀近くも人々がそこにこだわった理由とそのエネルギーは何か、などである。

(木戸久二子氏「研究の現在と展望」^②)

このうち第五点第六点に対しては、「享受者が同時に作者にもなる」のが歌物語の特徴であるという片桐氏の持説^③などがそのまま再反論となる。又、一部の章段(小段)は『古今集』(九〇五)前後、橘忠基の「忘るなよほどは雲るに……」を借りて作った第十一段が十世紀後半であるのは衆目の一致するところであるから、半世紀に亘って人々が生成・増益し続けた事実は、その理由とエネルギーを問う前に、まず事実として認めねばなるまい。第一点は第一章段から第三章段まで用語法や創作技巧に共通性^④がある、段序にも深い意味があるとの主旨で、私もおおむね賛成したいが、言わば内部徴証に拠る議論に過ぎず、第三次の作者が第一次第二次章段を十分に咀嚼し表層深層に於いて圧倒的な影響を受けつつ書き継いで行ったと考えれば、決定的な反論にはならない。確かに片桐氏の内部徴証も傍証として有力ではあるが、『源氏

物語』の「二段階成立論」とも言うべき玉鬘系十六帖後記説や帚木グループ後記説、和辻哲郎氏の論などとは違って、出発点は外部徴証にあるので、その当否、即ち、第四点と第三点が正しくないか正しいかの再検討が肝心要めである。

第二次『伊勢物語』と第三次『伊勢物語』を区別する外部資料として用いられている雅平本業平集や在中将集（両業平集と呼ばれることもある）の成立を十二世紀以降に引き下げる論者は、福井貞助氏⁽⁶⁾、井川健司氏⁽⁷⁾、山田清市氏⁽⁸⁾、渡辺泰宏氏⁽⁹⁾、鈴木隆司氏⁽¹⁰⁾である。但し最も新しい鈴木論文（平成十年）はあくまでも在中将集の最終的な成立年代が院政期以降、「少なくとも公任時代よりは後」とするものなので、外部徴証としての無効性を強調しているわけではない。

五氏に対する私の再反論は、次の通りである。

両業平集の成立がもし十一世紀半ば以降なら、いやしくもインテリである以上、「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」と言われるくらいだから、編者は必ず『源氏物語』を読んでいるはずである。総角巻で句宮が業平の歌だと言っている「うら若みねよげに見ゆる……」（天福本『伊勢物語』第四十九段）を何故採らなかったのか。

かつて、片桐氏が「拾遺集（一〇〇六）を見た形跡が無いから、両業平集の成立は十世紀である」と述べたのに対し、右の五人のうちほぼ全員が「拾遺集は流布しなかったから、編者が見なかっただけである」と反論した。同じ論法で行けば、十一世紀に『源氏物語』が流布しなかったことを実証しない限り、両業平集の成立を十二世紀以降に引き延ばすことはできないのではなからうか。

その他、第三点の再検討をはじめとする重要な議論に就いては別稿、若しくは、別の機会に譲りたいが、現存資料と現時点で伝わっている情報から判断する限り、両業平集の成立を「後撰集（九五一年下命）以後古今六帖（九七六―九八七）以前」とする点を含めて、片桐氏の仮説体系に従うのが最も安全だと思われるのである。

二 口承文芸としての第一次第二章段

改めて考えるに、昭和四十三年『伊勢物語の研究〔研究篇〕』の意義は、何よりもまず、「歌集から歌物語へ」という当時の通説を逆転させて、「歌物語から歌集へ」という筋道を明確にしたところにある。即ち、第一次伊勢物語は古今集業平歌の原資料となった、第二次伊勢物語は両業平集の原資料の一つとなった。では伊勢物語自体は何を資料としたかという点、歌語りという口承文芸に着目なされたのであった。「歌

語りから歌物語へ」という発想は、折口信夫氏⁽¹⁴⁾、阪倉篤義氏⁽¹⁵⁾、原國人氏⁽¹⁶⁾らのすぐれた研究にも見られるが、特に片桐氏が次のように述べているのに私は注意を惹かれる。

現在の普通本伊勢物語百二十五段のうちに、係助詞「なむ」を物語の地の文に用いた例は四十例ある。ところがその半分にあたる二十例が僅か二十五段程度しかなかった類従本業平集の典拠になった伊勢物語に存在するのである。その意味で、物語を「語る」という姿勢は、この類従本業平集の典拠となった伊勢物語において特に強かったと言えるのではないかと思うのである。⁽¹⁷⁾

「なむ」に就いては本拙稿の対象外とするが、比較的古い時期の章段において「語る」姿勢が強かったという見通しは継承したい。

まず、『伊勢物語』の特徴aとして「同語反復」を挙げたい。同語反復は、全国昔話記録⁽¹⁸⁾、風土記⁽¹⁹⁾（特に『出雲国風土記』の「国引き」の神話）、チベットの民間伝承である「班竹姑娘」⁽²⁰⁾、『古事記』⁽²¹⁾、『平家物語』⁽²²⁾など口承文芸やそれに近い文芸によく見られるが、『伊勢物語』では第九段第一段落にある。

三河の国、八橋といふところにいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかげに下り居て、かはいひ食ひけり。その沢に……⁽²⁴⁾

作者は「……八橋といふところにいたりぬ。」で、いったん立ち留まって、「八橋」という地名の由来を説く。しかし、「八橋」と言うのは橋を八つ渡してあることに拠る「だけで十分わかるのに、おそらく紫式部なら」……によりてなむ。」で文を終えているだろうに、実線部でもう一度「八橋と言ひける」と言うのである。このような十音節にも及ぼうとする反復表現は、『伊勢物語』全章段より百倍長い『源氏物語』には一つも見られない。

むかし、男、津の国菟原の郡、蘆屋の里にしろよして、いきて住みけり。昔の歌に、

蘆の屋の灘の塩焼きいとまなみ

黄楊の小櫓もささずきにけり

とよみけるぞ、この里をよみける。ここをなむ蘆屋の灘とはいひける。この男、なま宮仕へしければ、……

（第八十七段）

この段の実線部も、聞き手の記憶に制限がある音楽享受の場合、気の効いたサービスと言えなくもないが、目で読む際にはやはり救いようのない無駄、欠陥であり、書承文芸の典型である『源氏物語』には現われないタイプの文である。

かやうのくだくしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしものとほしくてみなもらしとどめたるを、など帝の皇子ならんからに、

見ん人さへかたはならずものほめがちなると、作り事めきてとりなす人のしたまひければなん（もらしとどめざりける）。あまりもの言ひさがなき罪避りどころなく。

（カッコ内は引用者⁽²⁵⁾）

有名な「夕顔」跋文であるが、カッコ内には実線部と反対の内容が入ることを論理的に類推するよう読者に期待して、紫式部は言葉を惜しんでいる。このような「理詰め押し」「余りにも無駄が無さすぎると思われる程に理がつんだもの」「同語反復を極端に嫌う」紫文の特徴については、吉沢義則氏『源氏随攷⁽²⁶⁾』が様々な例を挙げて居る。

特徴の1として「脚韻に似た効果」を挙げたい。

伊勢の文章は簡潔なボツンボツンと切れたものからなつてをり、普通の文章よりも文尾の同一反復が多い。

昔おとこ有けり。わらはよりつかうまつりける君御ぐしおろし給ふてけり。もとの心うしなはじとて、む月にはかならずまうでけり。……

（益田勝実「上代文学史稿」案⁽²⁷⁾の「9」）

益田氏が傍らに○を付けた「けり」「けり」「けり」は、更に例えば第九段冒頭の「けり」「けり」「けり」とともに、絶句や律詩の偶数句末、若しくは、第一句と偶数句の句末、シャンソンのフレーズの終わりに聞き取れるような押韻の効果がある。

なお、重文の文節の終わりの同一助詞の反復は、右のような単文の連続する箇所、文尾の同一助動詞の反復と同じ効果が期待される。益田氏に倣って、傍らに○を付けることにしよう。

……その河のほとりにむれるて、「思ひやれば、かぎりなく、遠くもきにけるかな」と、わびあへるに、渡守^{わたもり}、「はや舟に乗れ。日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。……

（第九段第四段落）

九谷才一氏はこのくだりを引用して次のように述べている。

日本語の文章について考へようとするとき、わたしはよくこのくだりを思ひ出す。思ひ出して当惑する。（略）「に」を三回もくりかへして平気である、何かずるずるとしどけない感じが、ひどく困るのだ。（略）

もしこれが格の低い本の一節なら、別に問題にする必要はない。世には昔から駄文が多いと達観すればそれですむ。しかし、第一流の古典の最も有名なところ、日本文学のサハリの箇所を十えらばきつとはいる、しかもかなり上位にはいる、あの都鳥のくだり、たいていの人が感嘆せずにはゐられない急所のところで、こんなぞろつぺえな書き方がしてあるといふ事実は、日本語の文章全体にかか

はることのやうに思はれてならないのだ。⁽²⁸⁾

だが、「に」を三回繰り返すしじけなさは『伊勢物語』全体の特徴ではなく、ましてや和文の特徴でもない。九谷氏が使っている「駄文」という言葉を敢えて使うならば、口承文芸を目で読むから「駄文」に見えるだけなのである、と専門家の端くれとして平安文学を弁護したい。私が『伊勢物語の研究〔研究篇〕』の意義を尊重する所以である。

特徴のcは、『伊勢物語』が単文や重文、特に単文を好むことである。

又一文で表現出来るものを、

昔男ありけり。(1)みやこのはじまりける時、(2)ならの京ははなれ、此京は人の家いまださだまらざりける時、(1)西の京に女有けり。(2)其女世の人にはまさりたりけり。(3)かたちよりも心なんまされりける。……

と、二つ三つの文で、述べてゐたりする。この哥物語と言ふ、哥の世界に芽生えた過渡的な叙事的形態の含んでゐる所の、短文表現の、素朴さ、文尾の同一反復及び詞書短文重疊による韻律と旋律、これは宿命的に伊勢物語がとらされた過渡的形態の所為である……

(前掲益田論文。但し益田氏は原文の文字の右肩に(1)(2)(3)の記号をつけている。読点はやや不鮮明) 益田氏が底本に用いたのは塗籠本系のものであるが、勿論、天福本でも

……(1)西の京に女ありけり。(2)その女、世人^{よひと}にはまされりけり。(3)その人、かたちよりは心なむまされりける。……

(第二段)

と、同様の指摘ができれば。

辛嶋稔子氏⁽²⁹⁾が第一次第二章段の特徴として指摘した「ソ系指示語」の類用もcと表裏一体の関係にある。直前の語を指すという性格はどういうわけかコ系指示語には見られず、⁽³⁰⁾ソ系指示語のみが短く切られた文と文をつなぐ役割を果たすからである。もともとソ系の全てがそのような役割を持っているわけではなく、例えば「その」の中には、考えられる幾つかのうち一つ(或いは一人)に特定する用例が数例あるが、しかし、単文の連続がソ系の頻度を高めている現象は、益田氏の文章と引用本文をはじめとする先行研究⁽³¹⁾を読んでいるうちに自然と見えてきた事実である。

三 書承文芸としての第三次章段

以上、耳から聞くのにふさわしい特徴を a b c と列挙してきたが、次の例は必ずしもそうではない。
第九十八段の全文を引用する。

むかし、おほきおほいまうちぎみと聞ゆる、おはしけり。仕うまつる男、九月ばかりに、梅のつくり枝に雉子をつけて、奉るとて、
わがたのむ君がためにと折る花は

ときしもわかぬ物にぞありける

とよみてたてまつりたりければ、いとかしこくをかしがり給ひて、使に禄たまへりけり。

「仕うまつる男」は口頭で和歌を読み上げたわけではない。最後の文節に出てくる「使」なるものに手紙として託したので、受け取った太政大臣は、「ときしも」に「きじ」が物名されていることに気付いただろうが、章段全体が口承文芸であるとしたら、聞き手は気付くだろうか。話し手は「し」をどのように発音すれば良いのだろうか。

第九段第一段落の場合、「ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」が物語享受者にとつても予告になるから、享受者は「句のかみ」に耳を敏てれば「かきつばた」の五文字をキャッチすることができただろうが、折句というものは作るのは大変だがわかるのは案外簡単なのであるが、三十一もの大量の音節の中から、位置の予告なしに、二音節の名詞をキャッチする、しかも名詞「時」の二音節目に、普段余り注意しない副助詞「し」を頭の中で濁点を加えた上でつらねて二音節の名詞「きじ」をキャッチする困難さは、程度が違うと言わざるを得ない。第三段作中歌の下句「引敷物には袖をしつつも」の「引敷物」の中から、「ひじき藻」をキャッチするのも、第九十八段の場合と同じくらい、困難であろう。耳から聞くのでは絶対にわからないと言いつもりはないが、耳になじみにくいのは確かである。敢えて極端な言い方をするが、紙に向かって筆を取るのでは絶対にわからないと言いつもりはないが、耳になじみにくいのは確かである。第十三段では、武蔵に移住した男から京の女への手紙の「上書」に「武蔵鎧」と書かれていた。その女は、いやでも何度も「上書」を目にするはずだから、武蔵逢う身なのだ、つまり、男が土地の女と結婚したのだ、と次第に気付いて行つたであろうが、この章段を口承文芸にする場合には、字幕スーパーを出す代わりに、もう少しサービシ的なコメントが補足されていても良さそうなものである。

以上、清音の語と濁音の語を掛けた掛詞・物名を眼目とする三つの章段は全て第三次章段に分類されるが、この他にも、第三次には目で読

む方が望ましい特徴^a（aとは逆に、「省略を好む」特徴）、^c（cとは逆に、「複文を好む」特徴）を持つ章段がある。

……はや夜も明けなむと思ひつゝあるたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。あなやといひけれど、神鳴るさわざにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けてゆくに、見れば、率てこし女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉^{しらたま}か何ぞと人の問ひしとき

露とこたへて消えなましものを

これは、二條の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでありけるを、御兄堀河の大臣^{せうと}、太郎国経の大納言^{おとど}、まだ下臈^{げらふ}にて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへし給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて後のただにおはしける時とや。

（第六段）

最後から二つ目の文「それをかく鬼とはいふなりけり。」（実線部）は、和歌の前の実線部や文脈から考えて、「それをかく鬼（はや一口に食ひてけり）とはいふなりけり。」を略したものであらう。しかし我々は何度か繰り返し目で読むことによつてそのような理解に達するのであつて、耳で聞く享受者は、テープレコーダーに録音して巻き戻すのでない限り、ほとんど理解不可能ではなからうか。

少なくとも、「蘆屋の里」でいったん立ち留まつて、「昔の和歌に、『蘆屋の灘の塩焼き……』と詠んだのは、この里のことを詠んだのである。」と解説した後、もう一度「ここをなむ蘆屋の灘とはいひける」と念押しした、あの第八十七段の作者、言い換えると、雅平本業平集の典拠となつた伊勢物語の作者ならば、第六段の和歌の後の実線部をもう少し親切に述べたと思う。

むかし、男、「五條わたりなりける女をえ得ずなりにけること」と、わびたりける人の返りごとに、

思ほえず袖にみなとの騒ぐかな

唐土舟^{もうしふね}のよりしばかりに

（第二十六段）

この章段では、「昔男」と、「昔男の友達」と、「五條わたりの女」と三人登場するのだから、少なくとも二つの文にすればよいのに（そして、文と文のつながりにはソ系指示語を使えばよいのに）、「しどけない感じ」「ぞろつぺえな書き方」を嫌うあまり、無理矢理一文にまとめた結果、人物関係がわからなくなつてしまつたのであらう。「わびたりける」の主語は、一条兼良の愚見抄を補正した解では「昔男」、和歌知識抄を修正した解では「昔男の友達」であり、どちらとも決しがたく、また、どちらの解であるとしても舌足らずだと評さざるを得ない。

最後に、第三次章段の特徴として、和歌の導入に「言ふ」が用いられる傾向を取り挙げたい。辛嶋稔子氏の創見に拠れば、第一次章段では和歌の直前が「詠める」、最後が「と詠む（と読みて）」型である例が多いのに対し、第三次章段では「と言ふ（と言ひて）」型が増えてくる。その理由としては、『古今集』（九〇五）では「……詠める」型の詞書が多く第一次も時代の風潮に倣った、第三次では和歌を特別扱いせず、普通の会話文と同様に扱うようになった、⁽³⁴⁾などが考えられるが、更に一つ付け加えるならば、書かれた作品である第三次章段の場合和歌であるのは見ればわかるのでわざわざ「と詠む」と書く必要性が弱いのではなからうか。やや啓蒙的になってしまおうおそれもある。

九三五年かその直後の『土佐日記』の貫之自筆本からして既に「地の文と和歌との間には少々の闕字がある」⁽³⁵⁾。『後撰集』（九五一年下命）以降成立の第三次章段（多くは『古今六帖』（九七六・九八七）以降か）の頃にはもっと一目瞭然の書写形態が定着していたかもしれないが、「少々の闕字」だけでも、一、二度読み返しさえすれば和歌がどこから始まるかすぐわかるのである。

書承文芸『源氏物語』（私見では、前編四十一帖は一〇〇八年以前。後編十三帖は一〇〇八年以降）の作中歌の直後は「と言ふ」系（複合動詞・敬語含む。「とあり」系「と独りごつ」系含まず）が百八十例以上、「と詠む」系の例は零である。参考までに、和歌の直前に一例、竹河巻の「詠みかけたまふ」（五巻六九頁）があるだけである。用例の数え方は論者によって違うだろうし、私の認定のしそこないもあろうが、それにしても「百何十例の」と言ふ「系」対「一、二例の」と詠む「系」という極端な数字の偏りは、少なくとも和歌の導入の仕方に於いては第三次が『源氏物語』に似て来ていると断定させる資料である。

四 結語

『伊勢物語』の第一次第二次章段の中には口誦性が強く残っている箇所がある。第三次もそれを全く受け継いでいないわけではないが、目で読むほうが望ましい章段も出現する。

冒頭に掲げた木戸氏のまとめのうちの第二点に対しては、口承文芸なら、小規模過ぎて困るということはない、と答えることができる。

もっとも「口承文芸／書承文芸」「音読享受／読書」は『伊勢物語』全百数十段を二分する基準としてははなはだ心もとないこと十分承知しているが、本拙稿は、既に提出されている「両業平集以前／以後」という基準を大前提とし、「以前」と「以後」の違いの一面に触れようという立場である。このような立場から言わせていただければ、第三次章段約七十のうちの一部に残る口誦性も、第一次第二次章段を十分に咀

嚼した第三次の作者がそれらの影響を作品に残した結果に他ならないのである。

《注》

- (1) 『伊勢物語の研究〔研究篇〕』（明治書院、昭和四十三年）
- (2) 王朝物語研究会（久下裕利氏、横井孝氏）篇『研究篇 伊勢物語の視界』（新典社、平成七年）所収。書きおろし。
- (3) 注(1)の著者第一篇のほか、片桐氏「伊勢物語成長論序説」（『国語国文』第二十六巻10号、昭和三十三年）の「二」など。
- (4) 例えば、渡辺泰宏氏「現存本伊勢物語生成序説」（福井貞助氏編『伊勢物語―諸相と新見―』（風間書房、平成七年）所収）
- (5) 例えば、石田穰二氏『源氏物語攷その他』（笠間書院、平成元年）所収「伊勢物語の初段と二段」、田口尚幸氏「伊勢物語の相補的解釈―その序説としての試論―」（所収は注(4)に同じ）。
- (6) 『伊勢物語生成論』（有精堂、昭和四十年）第三章第二節「業平集考―勢語古形推定説に関して―」
- (7) 「現存本業平集の成立」の「二」（早大平安朝文学研究会編『平安朝文学研究―作家と作品―』九一頁）
- (8) 「在中将集の成立と典拠伊勢物語の性格」。「伊勢物語の成立と伝本の研究」（桜楓社、昭和四十七年）
- (9) 「在中将集・雅平本業平集考―その性格と伊勢物語の成立に関する試論―」（『国語と国文学』第六十巻12号（昭和五十八年）に初出。「伊勢物語の視界」に再録。
- (10) 「在中将集の性質と成立（上）」同「（下）」。「『国語国文』第六十七巻2号3号、平成十年。
- (11) なお、先行論文の収集で主に頼ったのは『伊勢物語の視界』（特に木戸氏「研究の現在と展望」）、『国文学解釈と教材の研究』第四十三巻2号（平成十年）所収「伊勢物語参考文献一覧」である。但し、後者では山田清市氏の御尊名に誤りがあるので、改める。
また、手元にある最新の学術論文は室城秀之氏「解説 業平集」（『和歌文学大系』一八（明治書院、平成十年十月）所収）であるが、
在中将集の成立年代を、『拾遺集』以前、以後のどちらに考えて居られるのか、私には読み取れなかった。どちらかと言うと、『拾遺集』

以前説」に傾いて居られるのではなからうか。

いずれにせよ、第四点をめぐる論争は、平成十年十月現在、どちらとも言い難い。

(12) 注(1)の著書第三篇第五章

(13) 但し、古今六帖の下限には異見もあるらしい。

(14) 「歌及び歌物語」など。『折口信夫全集第十卷』（中央公論社、昭和三十一年）

(15) 「歌物語の文章―「なむ」の係り結びをめぐって―」。『国語国文』第二十二卷6月、昭和二十八年。

(16) 「伊勢物語の成立と作者」。『一冊の講座伊勢物語』（有精堂、昭和五十八年）

(17) 注(1)の著書二九八頁

(18) 清水好子氏「物語の文体」二の注1。『国語国文』第十八卷4号（昭和二十四年）に初出。『源氏物語の文体と方法』（東京大学出版会、昭和五十五年）に再録。

(19) 渡辺実氏『平安朝文章史』（東京大学出版会、昭和五十六年）七頁―八頁

(20) 注(19)の著書六―七頁

(21) 注(19)の著書八頁

(22) 七五調の地の文、地の文や会話文に於ける決まり文句の多用、同語反復など口誦性を持つ。但し、基本的には、書承文芸で目で読むのがふさわしい長編小説に分類したい。

(23) 作り物語に就いては、『源氏物語』はもとより、『竹取物語』も、書記言語の性格が非常に強くと、渡辺氏『平安朝文章史』に従って、考えたい。

(24) 『伊勢物語』の引用は集成（底本は学習院大学現蔵天福本）に拠る。但し、適宜、傍記やカッコ内の補入、省略を行う。

(25) 『源氏物語』の引用は新編全集に拠る。

(26) 昭和十七年初版。特に「一一」「一二」「一四」。『源氏物語研究叢書』第9巻（クレス出版、平成九年）に再録。

(27) 『日本文学史研究』第四号、昭和二十四年。

- (28) 『文章読本』（中央公論社、昭和五十二年）第十二章。カッコ内の略は引用者。
- (29) 「伊勢物語の三元的成立の論」、『文学』第二十九巻10号、昭和三十六年。
- (30) 神尾暢子氏「伊勢物語の指示表現」（大阪教育大学『国語表現研究』（昭和六十一年十二月号）所収）、田口尚幸氏「伊勢物語におけるソ／コ系指示語の使い分け（続）」（『国語国文学報』第五十六集（平成十年）所収）
- (31) 注(30)のほかに、渡辺実氏『平安朝文章史』（特に三三頁と二二七頁の注⁽¹⁴⁾）。
- (32) 注(1)の著書第六篇第二章
- (33) 辛嶋論文のほかに、宮谷聡美氏「『伊勢物語』の和歌―「よむ」歌と「いふ」歌―」（『国文学研究』一〇五（平成三年）に初出。『伊勢物語の視界』に再録）も参照させていただいた。
- (34) 注(1)の著書第四篇第一章
- (35) 池田亀鑑氏『古典の批判的処置に関する研究』（岩波書店、昭和十六年）第一部五八頁6～7行

（付記）

本拙稿は平成十年度全国大学国語国文学会秋季大会（於中京大学）口頭発表「口承文芸としての伊勢物語―三段階成立論を前提に―」を改題し、論述の順序を変えて、まとめたものである。席上、井川健司先生に貴重な御教示をいただいた。記して心から謝意を表します。